

「人財開発室」を拠点に、 細やかな支援と育成

— 東京都プリプレス・トップン株式会社（東京都） —

28年前に設立された第三セクター方式の特例子会社では、
各地に分室を増やしながら、業務拡大と“人財”育成に力を入れている。

職場
ルポ



（文）豊浦美紀 （写真）官野 貴



取材先データ

東京都プリプレス・トップン株式会社

〒174-0051 東京都板橋区小豆沢^{あずさわ}1-16-2

TEL 03-3968-5800 FAX 03-3968-5858

Keyword: 重度障害、知的障害、精神障害、ジョブコーチ



パソコンを使用して印刷物のレイアウト編集（組版）を行う

POINT

- 1 通いやすく働きやすい充実した設備環境
- 2 グループ各社に分室をつくり業務を拡大
- 3 専門職常駐の「人財開発室」を拠点とした支援

都・板橋区との第三セクター

「東京都プリプレス・トッパン株式会社」（以下、「プリプレス」）は、印刷業界大手の「凸版印刷株式会社」が1993（平成5）年、東京都および板橋区と共同出資して設立した第三セクター方式の特例子会社だ。

事業内容は、凸版印刷からの委託を中心に、各種印刷物のDTP制作から自動組版システム設計・開発、WEBコンテンツ制作、オフィスサポート、紙すき事業までと多岐にわたる。社員120人のうち障害のある社員が91人（身体障害51人、知的障害24人、精神障害16人）、グループ適用の障害者雇用率は2・31%（2020（令和2）年6月1日現在）となっている。

凸版印刷グループ会社の社長などを経て2018年からプリプレスの取締役を務める一瀬逸三さん^{いちのせいつさぶろう}が、これまでの経緯



東京都プリプレス・トッパン株式会社
取締役の一瀬逸三さん

について話す。

「重度障害者雇用モデル企業として、以前は肢体不自由など身体に障害のある社員が多かったのですが、2014年から本格的に知的障害や精神障害のある社員を採用してきました。特性も職務能力も多様化しているので、近年は、より細やかな合理的配慮や支援、そして人財育成に力を入れています」

設立時から充実の設備環境

都営地下鉄の志村坂上駅から徒歩10分ほど、印刷関係の事業所などが点在する一角に、プリプレスの本社がある。3階建てビルの地下と屋上には、平置き式の駐車場が計40台分確保され、交通機関での通勤が困難な車いすユーザーの社員が使っている。エレベーターは車いす4台分まで乗ることができ、廊下や業務フロアのデスク周りも、車いすがすれ違っても十



駐車場は車間が十分に確保されており、不自由なくドアを開閉できる



フロアには段差がなく、車いす同士が余裕をもってすれ違える広さがある



エレベーターは奥行きがあり、車いす4台を収容可能だ

分なほどの広さが確保されている。多目的トイレは男女それぞれ2カ所あり、内部障害者向けのシャワーも完備。トイレの使用状況は、業務フロア入口に設置された信号機のようなランプで確認できる。業務フロアと同じ2階にある食堂は、車いすに合わせた高さの丸テーブルや自販機などがあるほか、奥には休憩室もあり、高さ40cmほどの畳コーナーが設けられている。取材時も、休憩時間になると社員が訪れ、畳の上で体を伸ばすなどし



人財開発室室長で社会福祉士・
精神保健福祉士の堀千枝美さん



辞典などを効率的に制作するための自動組版システムの開発を行っている



製造部でIT開発を担当する
係長の谷島慶彦さん

てリフレッシュしていた。

こうした職場環境は、28年前のプリプレス設立当時から整えられていたそうだが、1999年入社で製造部IT開発担当の係長を務める谷島慶彦さん（45歳）も「入社当初から、とても働きやすい職場でした」とふり返る。谷島さんは中学生のころ筋肉の病気であるジストニアと診断された。「日ごろは松葉づえで移動していますが、職場内では動きやすさを実感しています。埼玉県の自宅から車で通勤できるのも助かります」と話す。

谷島さんは大学で法学部だったが、卒業後に障害者向けの就職セミナーを受けてプリプレスに入社。翌年から凸版印刷の本社に2年ほど出向し、研修を受けてIT系の担当になった。いまは国語辞典など分厚い印刷物の自動組版システムの開発をしている。

「文系の自分には畑違いの仕事でしたが、基礎のスキルをしっかり学ばせてもらえました。また本社の人たちと一緒に働くことで、その後の委託業務などの連携もスムーズにできました。出向は、とてもよい機会だったと思います」

分室でオフィスサポート

プリプレスでは知的障害や精神障害のある社員を本格採用するにあたり、凸版

印刷の本社に併設する形で「秋葉原分室」をつくった。おもな業務はシュレッダーやスキャニング、郵便物の封入封かん、データ入力、備品補充といったオフィスサポートだ。

しかし立ち上げてからしばらくすると、小さなトラブルが起きるなど順調にいかないことも増えたという。一瀬さんは「当時、障害のある社員を支援する指導員たちは、特別な研修などを受けていないながらも親のような気持ちでサポートをしてくれていました。ただ、よかれと思ってかけた言葉が逆効果だったり、必ずしも本人や職場のためになっていなかったりしたこともありました」と明かす。

そこでプリプレスは2018年、社会福祉士・精神保健福祉士の堀千枝美さんを採用。総務課に配属された堀さんは、それまで障害者雇用にかかわってきた経験を活かし、職場の支援体制の強化に力を入れてきた。

堀さんが最初に取り組んだのは、在籍する社員一人ひとりの障害特性に関する情報をまとめたフェイスシートづくりだったそう。

「採用時に本人から申請された内容だけでなく、複合的に重なる特性や病気などもありました。極めて個人的な情報でもあるので、現場サイドとは、実際に必要な合理的配慮のポイントについて共有

したり、必要最低限の情報を上司に伝えたりしました」

その一方、監督的な立場にある社員に毎週集まってもらい「ラポール研修」を2年間に渡って行った。ラポールとは信頼関係のことを指す。堀さんによると「研修では障害特性について学ぶだけでなく、職場で支援する側が燃え尽き症候群（バーンアウト）にならないよう、お互いに仕事を通じ支え合う関係性の構築を目的としました」という。さらに指導員には、障害者職業生活相談員や企業在籍型職場適応援助者（ジョブコーチ）の資格認定講習なども受けてもらった。

一瀬さんは「一定の理解が進んだことで、現場でのコミュニケーションがずいぶん潤滑になったと思います。監督職がみな一緒に学ぶことで、それまで縦割りのだった部署間に横のつながりも生まれ、雰囲気明るくなりましたね。もちろん、まだ不十分かなと感じる部分もあります。会社としての歴史が長いほど、現場を変えらるのも簡単にはいかないかと覚悟しています」と率直に話してくれた。

「ふり返り」で自覚と成長

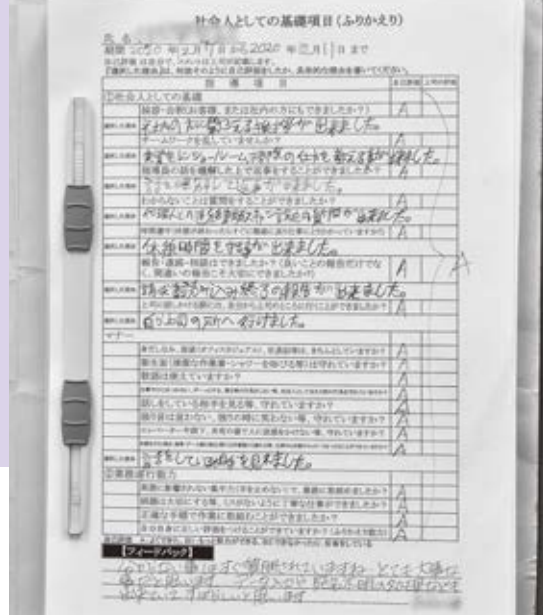
分室は小石川、芝浦、板橋と順調に増え、いまでは計4カ所で指導員5人を含む計27人が従事している。



パソコンでのデータ入力やデータの確認作業を担当している



秋葉原分室で働く掃部関智樹さん



毎週の「ふり回り」に使用されるシート

ここで社員向けに効果を上げているのが、毎週の「ふり回り」だ。社員一人ひとりととって必要だと思われる「社会人としての基礎」と「業務遂行能力」について計20項目ほどの質問を表にし、自己評価をA（よくできた）・B1（もっと努力できる）・B2（できなかった）・C（反省をしている）の4段階で示す。隣の欄に上司の評価も同じように記入され、フィードバックのコメントとともに本人に返される。

質問は「指導員の話を理解した上で返事をすることができましたか」、「報告・連絡・相談はできましたか（良いことの報告だけでなく、間違いの報告こそ大切にできましたか）」、「紙類は大切にしている等、ミスがないように丁寧な仕事ができ了吗か」といった一般社員も問われるような内容だ。質問項目は、本人たちの成長ぶりに沿って見直している。このふり回りを始めてから、現場はずいぶん変わったという。

「例えば、自閉症の傾向があり勤務中も独り言が多かった社員に、ふり回り項目で『仕事のマナーとして、独り言は控えましょう』と伝えたことで、本人も『仕事としての姿勢のありかた』を意識でき

るようになりました。ふり回りシートの項目は、指導と成長の指標にもなっています」と堀さんは話してくれた。

また分室では、堀さんが中心となって、定期的にグループワークによるソーシャルスキルトレーニングも行っている。「上司に話しかけるタイミング」、「仕事を通じたチームワークの形成」といったさまざまなテーマで学んでいる。

一瀬さんは「社員一人ひとりが社会人の自覚を持って、いきいきと働けるようになったと感じますね。最終的には、彼らが実社会での自立した生活につながっていききたいと思っています」と手応えを語る。

2014年入社で、秋葉原分室に所属している掃部関智樹さん（29歳）は、地域の就労支援事業所の工場で働いていたところ「一般就労のほうに向いている」とアドバイスされ、板橋区障がい者就労支援センターでパソコンスキルなどを学んだ経緯がある。いまはパソコンを使った入力作業や、同僚が入力したデータの確認を任されているそうだ。

勤務中に気をつけていることについて聞いたところ、苦笑いしながら「感情のコントロールがうまくできないことがあって、それを抑えることを意識しています」と返ってきた。堀さんによると職場で週1回、ふり回りシートを書くこと

で、自分の感情の起伏を客観的にとらえられるようになっていくそうだ。毎回、指導員から「感情のコントロールができています」といったコメントがつくと自信にもつながる。「今後は、実習生や後輩たちにもっと仕事を教えられるようになります」と抱負を語ってくれた。

紙すき工房で達成感

2019年には「紙すき」事業もスタートした。グループ会社のパッケージ印刷などで発生した損紙を再利用するための事業で、知的障害のある社員6人が従事している。

プリプレス本社3階の一角、「紙すき工房」という表札が掲げられたドアを開けると、部屋のなかでは防水エプロン姿の



水槽やバキュームなどが設置された紙すき工房



紙すき工房で活躍する松田智浩さん



バキュームを使用し、水分を素早く除去する



フィルムをはがす工程を実演する指導員の岡田和志さん



網杓を使ってすいていく。
仕上がりを左右する大事な工程だ



損紙が封筒や便箋などのステーショナリーに生まれ変わる

社員たちがテキパキと手を動かしていた。近くの人に何をしているのか声をかけると「これは乾いた紙をローラーにかけて、厚さが均一になるようにしているんですよ」とていねいに教えてくれた。

指導員を務める製造部紙すき工房担当の岡田和志^{おかだかずし}さんが、作業工程を説明してくれた。まず紙パックの表裏についた薄いフィルムを、カッターなどを使ってきれいにはがし取り、水と一緒に大きめのかくはん機に投入。4時間弱でトロトロになった液体を水槽に流し込み、網杓^{みじょう}を使ってすいていく。木版に移しかえた紙を特殊な台に乗せ、バキュームで水分を取り、さらに棚の上で数時間から数日乾かす。大部分の工程が手作業だ。岡田さんによると「天候によって湿度も変わるの、でき上がりの紙の厚さも微妙に違ってきます」とのこと。手紙やハガキ、

封筒、名刺用に種類が分かれているため、それぞれ均一の厚さになるよう日々統計を取りながら調整している。立ち上げ1年の工房だが、岡田さんは「私も社員とともに成長していると感じます」という。

「当初は工程の担当を固定していましたが、1人に過度な負担がかからないようチームで目的を共有し練習したところ、全員ができるようになり、みんなで大きな達成感も得られました」

工房立ち上げと同時に入社した松田智浩^{しゅうだとも}さん（23歳）は、「自分ですいた紙が、きれいな商品になるのを見るとやりがいを感じます。一方で、同じようにすいたつもりでも厚さが違うので、簡単にはいかないなと思います」と話してくれた。

紙すき工房で生き返った紙は、凸版印刷が運営する「印刷博物館」（東京都文京区）で、手紙セットなどとして販売し

ている。地元の小学校などから子どもたちを招いて開催される「紙すき体験教室」も好評だ。

人財開発室を拠点に

プリプレスは2019年10月に「人財開発室」を開設した。室長となった堀さんは、日ごろは本社のほか分室も回り、社員との面談や研修などを通して社員や各拠点のジョブコーチと課題を共有し、育成に向けた環境調整などを重ねている。さらに凸版印刷グループ各社にも出向いて、障害者雇用を進めていくための社員研修やコンサルティング業務も手がける。

堀さんは「凸版印刷本社やグループ会社の障害者採用に立ち会ったり、社内での精神疾患のある方と面談し雇用条件を変えたりするなどの支援業務も増えています」と話す。最近も、精神疾患を機に、障害者手帳を取得して職場環境を整えてもらうことを選んだ社員がいるという。

一瀬さんは、「社内だけでなく凸版印刷本社とここまで連携ができているのも、専門職の堀さんが常駐して日々やり取りしているおかげです。私もわからないことは何でも聞いて、教えてもらっています」と絶大の信頼を置いている。

2020年に入社した田中哲也^{たなかてつや}さん（31歳）は、堀さんの業務のサポート役と



バリアフリー情報サイト「らくゆく」



パソコン業務のほか、電話対応などを受け持つ



人財開発室で堀さんをサポートする
田中哲也さん

して人財開発室で活躍中だ。田中さんは大学卒業後に体調を崩してしまい、病院で軽度の発達障害によるものと初めて診断されたという。その後、就労移行支援事業所に通っていたときにプリプレスの秋葉原分室を見学、そこで堀さんに声をかけられたのを機に入社したそう。堀さんは「人財開発室と一緒に働く仲間を探していたところでした。彼は『人を支える仕事がしたい』と話していて、実際に、人の話を聞く姿勢もすばらしかったのを覚えています」と話す。

田中さんは大学で数学科を専攻していたこともあり、パソコン業務なども得意。ただ、物事の優先順位を決めるのが不得意だったり、何が大事な部分か混乱したりすることがあるため、堀さんが様子を見ながら助言しているという。

人財開発室では、パワーポイントなどを使った資料作成や電話対応、記録作成、社員の作文添削といったサポートも引き受ける。「今後は、もっと社内の同僚を支えていけるような存在になりたい」と話す田中さんは、堀さんと同じようにに精神保健福祉士の資格取得を目ざして勉強も始めているそう。

バリアフリー情報サイトも

プリプレスでは新規事業も続々と進み

つつある。

まずは2021年春のWEB公開を予定しているバリアフリー情報サイト「らくゆく」。これはおもに車いすユーザーやベビーカー利用者向けに、車や電車を使って出かける目的地までの最適ルートマップや、途中で利用できるバリアフリートイレ・駐車場・施設、トラブル時の病院や避難先などの情報を提供するというものだ。

もともと社内の車いすユーザーから「自分たちが出かけるために本当に必要な情報を集めたサイトがほしい」という声が上がリ、それをプリプレスの事業として立ち上げたという。作成にあたり、実際に社内の車いすユーザーたちが駅周辺の調査を行い、写真の撮影などを行っている。先ほど登場した製造部の谷島さんもWEBコンテンツ制作でかかわっている。

「歩道の段差や道路の傾斜、トイレの様子などを調べて、マップと連携させて掲載しますが、スマートフォンで簡単に検索できるよう工夫しています。観光地などの360度バーチャルツアーも計画しています。多くの人たちに活用してもらえよう内容にしたいですね」

取材時は浅草、秋葉原、六本木などの外出スポット別の目的地情報が完成しており、まだまだ増やしていく予定だという。

さらに2020年のコロナ禍を機に、凸版印刷から「プリプレスでやれないか」と打診されたのが除菌作業だ。グループ会社も含めた各職場でニーズが非常に高いことがわかったという。一瀬さんたちはさっそく、クルーズ船での除菌作業を手がけた清掃専門の企業に相談し、ノウハウなどを学んでいるところだ。

社内では在宅勤務やテレワークなど場所にとらわれない働き方の導入についても検討を始めている。一瀬さんは「情報の扱いや雇用管理はどうするかといった課題もありますが、うまくいけば業務の幅も広がっていきけるかもしれません」と意気込む。「プリプレスの一人ひとりが積み重ねてきた経験や、まだまだ伸びしろのある能力を、もっと発揮できるような職場環境をつくっていきます。これは同時に、凸版印刷全体の社員の働き方改革にもつながっていくと思います。さまざまな取組みをモデルケースにして、凸版印刷のグループ会社にもどんどん波及させていけるよう、連携しながら業務内容や職場の拡大を図っていききたいですね」

2021年は、宮城県仙台市に新たな分室を立ち上げる計画を進めているという。プリプレスでつちかわれた実績が、さらに多くの職場や業務で活かされることが期待されている。